

教会会報

川畔の尖塔

日本キリスト教団札幌教会

「死から命へと移る」



牧師

米 倉 美佐男

ヨハネによる福音書5章19〜47節
 「はっきり言っておく、わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。」(24節)

今日はイースターです。主の復活日です。キリスト教の祝祭日では最も古い祝日です。十字架にお架かりになられ、葬られた主イエス様が蘇られたことをお祝いする日です。

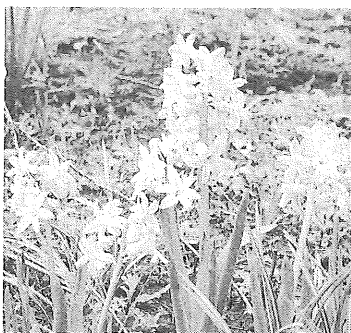
マタイの福音書に次のように記されています。「そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真つ二つに裂け、地震が起こり、岩

が裂け、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に配入り、多くの人々に現れた。百人隊長と一緒にイエスの見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、「本当に、この人は神の子だった」と言った。」27章51〜54節
 神殿の幕が二つに裂けたのは、神と人とを隔てる中垣が取り除かれ、神と人との断絶していた交わりが回復したことを伝えてくれるのです。主イエス・キリストの十字架の死は、本来あるべき神との関係を人間が回復するために必要なことでした。なぜなら人間は自分の力では失われた神との関係を取りもどすことができなかったからです。

「父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業を故におしめしになって、あなたたちが驚くことになる。」(ヨハネ5・20) 十字架は確かに大きな驚きです。神は愛する独り子を罪の人間を救うために十字架につけるといふ、父なる神の痛みによって、罪人をお赦しになられ

たのです。

「あなたがたは、いぜんは自分の過ちと罪のために死んでいたのです。」(エフェソ2・1)。聖書には、神との関係が閉ざされた状態の人間を死という表現で語っています。「はっきり言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと与えにられました。」(24節P172) キリストの言葉を聞いて信じるのです。そして従うのです。私たちの全存在を主に委ねて従う時に、死から命へと移されるのです。復活の主と出会う人生があるのです。神の御声を聞くことからスタートしましょう。今その時が来ているのです。復活の主イエスと共に生かされる幸いを感謝いたします。



ヒヤシンス

イースターの 思い出



鈴木 恵子

イースターが巡ってくる度、いつも私は洗礼式を思い出し胸が熱くなります。

一九五五年十六歳のイースターに、何もわからないまま、イエスさまの父なる神様にしっかりと繋がって生きていきたいと受洗しました。

クリスチャンホーム、ミッシヨンスクールの環境で育った私には、沢山のお友達が礼拝に出席していたので、ごく自然に導かれたのですが、イースターが近くなると何だか不安で落ち着かなくなりました。畳の部屋の食卓の下に潜りこんで、一時間くらい小声で讃美歌を口ずさんだり、自問自答して心を落ち着かせていましたが、家の誰もが気がつかないようでした。

洗礼を授けていたから、会衆一同で讃美歌一九九番「わが君イエスよ」を

歌っていると、私の目から涙がこぼれ落ち、歌うことが出来なくなりました。後ろの席で讃美している母の嬉しそうな声が、はつきりと全身に伝わってきて、言葉には言い表すことの出来ない感動を覚えたのでした。十年くらい私の愛唱讃美歌は一九九番と言っていたことを思い出しました。

二十年前、病氣治療のため仕事を辞めた夫と二人思い出作りの旅に行った時、ヨーロッパと日本のイースターの祝い方の違いにびっくりしました。

観光バスの中で、ガイドさんが「皆さん、ちよつと外を見て下さい。あちらこちらに黄色の花が飾られています、何という名前の花か知っていますか？」と聞いたので、私は、日本でも咲いているし、生け花でも使っていたので「ミモザの花」と答えました。

「ミモザは春を告げる花で、こちらではキリストの復活を祝う春のお祭りとして人々に親しまれています。昨日も、ミモザの花で飾られた花車のパレードがありました」と話されました。イースターのお祭りのことを聞いて、私は日本とヨーロッパの伝統・文化の違いに、目を開かされる思い

でした。

イースターと桜

秋本 秀人

私が札幌教会にお世話になるようになったのは二十五年ほど前のことです。あの頃は、まだ創成川の対岸にあるホテルも営林局の建物でした。雪解けが進み春が近づいてくると、あの敷地内に残されたサクラが、いつ色をつけ始めるか楽しみになりません。

大学生まで教会とは縁の無い生活をしていた私でしたが、この教会で結婚式をさせていただいたのが一九八九年の四月のことでした。この年は、桜の開花が例年より早く礼拝堂の玄関から見えた桜がとてもきれいでした。友人や少年団で指導した子どもたちと一緒に見た桜を忘れることができません。この時は、まだ求道中であり、義母の縁でたくさんの方にお世話になったことを大変ありがたいと感じました。

その後、神様から娘を授かり妻が受洗したあとも、時折記念の礼拝などに参加していた私でした。まだ赤ちゃんだった娘を連

れて礼拝に出席するようになってから、神様の教えが心の中に浸みるようになってきました。仕事で悩んだこと、その悩みを周りの人たちの支えによって乗り越えてきたこと、仕事を通じてたくさんのおき隣人と巡り会えたこと、そしてよき家族と一緒に暮らしていること。すべてが神様のお導きと感じ、二〇〇〇年のイースターに受洗を決意しました。

まだ二歳だった娘の幼児洗礼と一緒に洗礼を受けたあの日のことは、今でも目に浮かびます。いつもは礼拝堂の二階であやかちゃんと一緒に「まごころこめ」を大声で歌っていた娘が一番前で神妙に説教を聴いていたこと。受洗の際には、意味もわからないまま清瀬先生に頭を水で清められキョトンとした表情を浮かべていたこと。

そして偶然にも少年団で指導した卒業生が北星中学校に進み、その日の礼拝に出席していたことも、神様による導きだったのかも知れません。

毎年、教会学校の子どもたちからイースターエッグを受け取ると、あの日のことを思い出します。そして、あの桜の開花がいつになるかと楽しみになります。

「イースター」について

考える

鈴木 重安

イエス様の復活がなかったらキリスト教は存在しない。

こんな大切な出来事なのに日本ではクリスマスほど知られてはいない。復活が理解を超えた出来事だからだろう。イエス様の弟子たちでさえ信じられなかったのだ。無理もない。外国の大切な日を器用に「おまつり」としてしまいう日本人でも、イースターは難しい。

「川畔の尖塔」にと原稿をお願いすると、クリスマスの記事は容易に書いてくださるが、イースターとなると教会学校で卵をもらった思い出くらい。

私がイースターから連想するのは南海の孤島、イースター島だ。南米チリのはるか西、ほぼ三角形で海岸延長約六〇kmの火山島だ。

一七二二年の復活日の夜、オランダ海軍提督ロツヘフェーンが発見しイースター島と命名されたが、人類はそれ以前の四〇五

世紀ころからポリネシア系の住民が住んでいた。ポリネシア人の社会は、絶大な権限を持つて支配する酋長を中心とした階級社会だった。

イースター島といえば巨大石像のモアイ像があげられる。その歴史はというと、七〇八世紀に住民たちが平らなプラットホーム状の石の祭壇を作り始め、十世紀ころにはモアイ像が作られたようである。部族の偉大なる祖先、神格化された王や勇者たちの霊を記念して刻んだものらしい。材料は直径約五五〇m、ラノララクという名の噴火口跡に産する、柔らかく加工しやすい凝灰岩がいくらかもあったのだ。

イースター島の風景を想像してみれば、広大でなだらかで岩石と草ばかりが覆う台地のあちらにひと塊りこちらにひと塊りと、風雨にさらされてあるいは傾きあるいは倒れたモアイ像の群像ばかりが存在する無人の境地：である。

私は若いころ、一度行ってみたかった。だが現実はずに無人の境ではなく、島の人口は約四〇〇〇人。島にはチリ海軍が駐留し、海兵隊もやって来る。主要道路は舗装され、乗り合いバスやタクシーが走り、

観光客にはレンタカーもある。

レストラン、ホテル、ディスコ、ガソリンスタンド、ビデオレンタルショップも



イースター島

ある。もちろん学校、病院、博物館、郵便局、テレビ・ラジオ放送局もあるという。私の「秘境への夢」は壊された。

最近思うこと

夜明けのガリラヤ湖畔にて



中野 映子

復活された主は、失意の弟子達に現れ、ご自身を示され励まされた。特にヨハネが書いた夜明けのガリラヤ湖畔での主との再会の場面は、絵を見るように美しい光景となつて深い印象を与えます。

その朝のペトロやヨハネなど弟子達は、本来の漁師の仕事に戻り、主と過ごした三年にピリオドが打たれたような状態になっていたと思われまふ。

不漁で諦めかけた時、岸に立つ人が「右側に網を打ちなさい」と声をかけた。結果は思いもよらない大漁であった。ヨハネは主であると気付き、ペトロは嬉しさの余り上着を着なおし、主に向かって泳いだ。

淀みがちだった弟子達の雰囲気は一変した。清々しい朝の湖畔に活気が漲り、陸

にはすでに炭火がともされていた。焼かれた新鮮な魚とパンは主が弟子達に配られた。

食後、主はペトロに「この人たち以上にわたしを愛しているか」と言われる。「はい

わたしがあなただを愛していることは、あなたがご存じです」とペトロは答える。

「わたしの小羊を飼いなさい。」訝るペトロに主は三度繰り返し問いかけられた。

これからのペトロの人生に、主が託そうとされている事の大きさとそれを最後まで支えようとされる御心を、「わたしを愛するか」の言葉に込められたのでしょうか。

主を「知らない」と三度否んだペトロを静かに見つめられた主が重なつてきます。



三宅 順

私は、東京の杉並区にある東京衛生病院というSDA教団の病院で仕事をしております。宗派は違いますが、暖かく迎え入れていただき、もう十五年目になります。

この病院には、院内に牧師部があり、医療スタッフの一員として二人のチャプレン

がいます。チャプレンが患者さんとお話した内容は、カルテにも記載されます。もちろん信仰をもつ患者さんばかりではありませんが、先生方の訪問を楽しみにされる方は多く、院内ではひっぱりだこです。ホスピスでの働きが大きいのはもちろんですが、決してそれだけではありません。

先日、あるNPO法人の方に病院をご案内する機会があったのですが、その方々は不思議そうに、「なぜ病院に牧師がいるのですか?」とお尋ねになりました。恵まれた環境が当たり前の感覚になっていたことに、改めて気づかされました。うまくお答えしようと思ってもあまりに壮大なテーマで、言葉に詰まってしまいました。後日牧師部でこの話をしたところ、「(牧師が)居て悪い?」と茶目つ気たつぷりに笑いながら、ひとりの先生はおっしゃいました。医療の限界が来て、もうこれ以上の治療ができなくなっても、患者さんやご家族と共に祈ることが出来ます。医療だけでなく、どんな問題に対しても、です。そのことに改めて感謝したいと思う今日この頃です。

(注) SDA教団Ⅱセヴンスデイ・アドヴェンティスト教団



一本の電話から



おかむら
岡村 信子

主人が天国に召された折、私は静かに受話器を取り教会に電話しました。一面識もない立場で、牧師先生にお話しするのは、緊張の連続でした。その主旨をお話しますと、しばらく間をおきまして、先生から「お引受けいたしましょう。」とのご返答でした。

その瞬間、私の頬に一筋流れるものがありまして緊張が少しほぐれていきました。とても有難い救いのお言葉でした。

時を経て私も教会に足を運ぶ機会を得ました。皆様の親切なお導きにより、主日礼拝も回を重ねる毎に慣れてまいりました。

また役員の皆様のご理解を得て、会員の仲間にも入れていただき感謝の日々です。婦人会の皆様には殊更ご親切をいただき、ほんとうに有難く御礼申し上げます。

これからは主の御心に添い、一步一步前を向いて進んで参りたいと思います。

☆転入・転出しました

○転入

西堀義信兄、克子姉、将仁兄(未陪)
三月一日、鉦路教会より転入されました。

○入会

高アンナ姉、三月一日、韓国の大韓イエス長老会磐石キリスト教会から転入が承認され、三月八日入会式が行われました。
また、三月十四日、札幌教会にて米倉美佐男牧師の司式により結婚されました。

○転出

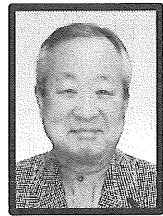
野村永子姉、三月一日琴似中央通教会に転出されました。



白鳥大橋

追悼

小林正徳 兄



2015年1月1日

温厚なる人 小林さんへ

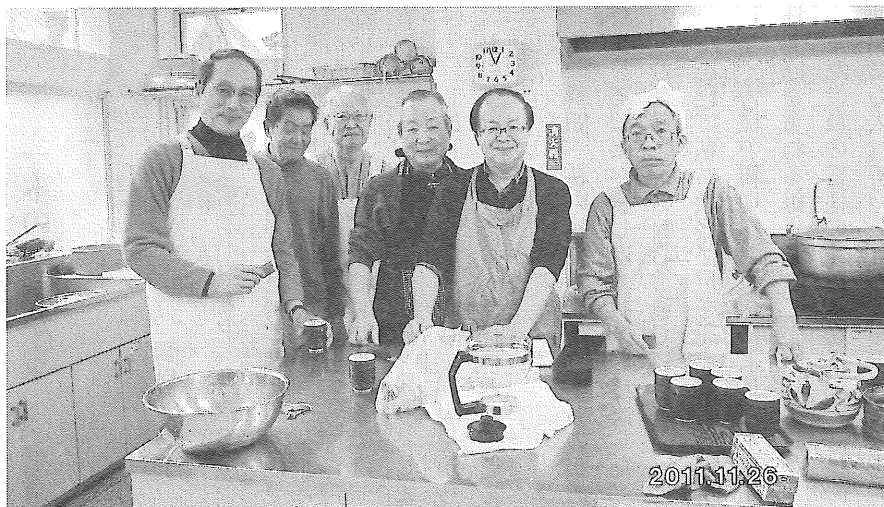
田中 満

兄とのお付き合いは、大人会での料理人の集まりからでした。シェフの大堀明夫親分の下に、私達下働きは、亡き小林兄、中村勤、佐々木三郎、蓑島輝夫等と何時も土曜日の昼集まり、最初の頃は、玉葱の皮剥きに涙しながら、又ジャガ芋、人参、ニンニク、リンゴ、皮を厚く切り過ぎ、中身が小さくなり残念至極。その都度シェフに叱咤激励され、皆で奮闘していたのを思い出します。又、カレーの隠し味としてオリブ葉、シヨウガ、ネスカフェ、特にワインボトル一本全部これがまた最高（私が飲んべえなので）。料理の真髄は自己満足ではないかと思う次第でした。

小林兄は、いつもニコニコしながら黙々と作業しておられました。また、昨年の永眠者礼拝の時も、後片付けをご家族全員が手伝ってくれました。大変感謝致し、頭

の下がる思いです。

先輩の無欲の奉仕に学び、札幌教会の原点はここだと思ひ知らされました。兄安らかに。



追悼

一戸千代 姉

2015年1月27日

一戸千代さんの思い出

遊佐 マサ

私が初めてお千代さんとお会いしたのはお千代さんが一戸静弥さんと結婚された時でした。自動車から降りたお嫁さん姿のお千代さんの手を取り、お座敷にお連れしました。とてもきれいなお嫁さんでした。私の祖母樋口タケが静弥さんのお母さんと仲良くしていて、家族ぐるみのおつきあいをしていました。

おいしい物を食べるのが大好きな私達は色々なお品を持ちよって食事したり、お茶飲みをしていました。息子さんの自動車でおいしい食材を買いに出かけられたりもしておられました。

お千代さんはお花も大好きで、ゼラニウムの鉢をたくさん育てていて、私も一鉢いただきました。今も赤いきれいな花を咲かせています。最近では訪問すると、お千代さんが二階の居間から「上がって来て！」と言われることが多くなっていました。心よりごめい福をお祈り致します。

東日本大震災

支援セールに想う事

大 濱 良 代

夏・冬に行われる「東日本大震災支援セール」、今年度も皆さまの祈りとご協力のもとに無事終えることが出来ました。ありがとうございました。

震災から四年、被災地の復興はいまだ成らず、福島原発事故に到ってはその手立てさえつかめていない状態が続いています。このような現状を告げる報道を眼にし、耳にすること、まるで地の底に引きずり込まれるような暗澹たる想にとらわれます。

そんな時、私の頭をよぎるのは、二〇一二年一月の箱根駅伝の往路で最後の山登り区間を走り、四年連続の新記録で区間賞を手にした東洋大の柏原龍二選手が「僕が苦しいのはたった一時間ちよつと。福島の人たちに比べたら、全然きつくなかった」との故郷である被災地福島によせたメッセージです。彼がこのエールの言外にこめた想いは、福島のみならず、被災地東北の

人々と「苦しみ」を共にしていくことへの決意であろうと思います。

私たちの支援セールはどうでしょうか。

たしかにそれは、世にいう一過性の義捐金ではありません。未だ涙の中に暮らす被災地への連帯を示し、元気になって欲しいとの祈りを込めたものになっているはずです。



しかし、「やり終えた」という喜びが薄く、何かむなしささえ感じるのは私だけでしょうか。その理由を探ってゆくと、支援する相手の顔が見えてこないことにあるように感じます。あれだけの大きな災難ですから支援したものを一か所に集め、そこからいろいろな所に分配するのは当然のことでしょう。私たちの支援もこの四年間それに従ってきましたがそのやり方を少し変えてみませんか。

現実に顔と顔を合わせ、「私たちはあなた方と苦みを共にします」と言える支援がしたいと思います。相手の息づかいを感じ、相手の手の温もりを隣にした支援活動が出来れば、それが本当の苦しみの共有になるだろうと思います。一方通行では力が出ません。もちろん今後婦人会役員会でも検討していきますが、皆さまはどう思っているのでしょうか、ご意見ご感想をお寄せください。

「彼らが呼びかけるより先に、わたしは答え、まだ語りかけている間に、聞き届ける」(イザヤ書65・24) 二月二十五日水曜日聖書通読でイザヤ書を読み終えました。その日のみ言葉の一節です。

教会 Do!

「ホレンコ」と共に

鈴木 紀子

1年を通して日曜日のスタートは「ホレンコ」の放送を聞いてという方が教会には多数おられると思います。我が家もいつのころからか、このスタイルが定着して今日にいたっています。

15分間の短い番組ですが、全道各地から寄せられる牧師先生たちの力強いメッセージと新旧さまざまな讃美歌の数々で、礼拝に出かける心の準備の時としてふさわしいひと時になっております。

1959年から半世紀にわたり、プロテスタント超教派のラジオ伝道番組として広い北海道の隅々までキリストの福音を伝えてきたこの活動ですが、現在財政的には非常に苦しい状態で、寄せられた献金と設立時の基金の取り崩しで放送を継続しているのが実情です。

近年、家族の介護や自分自身の高齢化を通して教会での礼拝参加が困難な事態が身近に感じられます。以前教会員だった母た

ちが、晩年この放送を楽しみ、励まされていた様を思いだすと、これからの時代にこそ放送伝道は一層望まれる働きであると思うのですが、いかがでしょうか？

札幌教会では現在、驚頭姉を窓口にあつた名の方が献金に協力しておられますが、更なる協力者が求められております。

毎年の教会バザーの協賛品として出品している「ホレンコポストカード」も利益はわずかですが、長年の継続がスタッフの方々に喜ばれております。

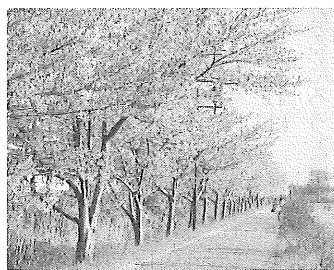


ホレンコスタジオの録音風景

ホレンコ事務局では、ご家庭で眠っている未使用の切手、はがきの寄付を献金として受け付けております。どうぞご協力ください。

これまでお聴きにならなかった方も、まずは放送をお聴きください。

「ホレンコ喜びへの扉」の放送時間は毎週日曜日午前6時35分からHBCラジオで聞くことができます。直前の6時20分に



伊達温泉横・旧JR胆振線跡桜街道

始まる北海道福音放送協会「世の光いきいきタイム」もおすすめてす。

編集

後記

主の御名を讃美します。

「川畔の尖塔」は当初の予定の執筆者に対して大幅に變動がありました。また会員消息にも變動があり、原稿内容が大幅に変わりました。三月一日以降の会員の變動には、報告のみとして改めて原稿の依頼を予定しています。年度が替わり新しい企画を期待します。